

牛の頸部腫瘍

○熊谷大史郎¹⁾、大野果菜子²⁾、日名由紀子¹⁾

1) 東総食肉衛生検査所、2) 元南総食肉衛生検査所

1. はじめに

胸腺腫は胸腺上皮細胞から生じる腫瘍であり、牛での胸腺腫の報告例は少ない。今回、ホルスタイン牛で胸腺腫の症例に遭遇したので、その概要を報告する。

2. 材料及び方法

症例はホルスタイン牛の雌で112カ月齢、一般畜として県内と畜場に搬入された。解体後検査時に、頸部腹側に腫瘍が認められた。腫瘍の断面をスタンプし、ヘマカラーによる染色を行った。また、腫瘍を20%中性緩衝ホルマリン液で固定後、定法に従いパラフィン切片を作成し、HE染色およびPAS反応を行った。また、抗サイトケラチンAE1/AE3抗体および抗CD3抗体を用いた免疫組織化学的染色を行った。

3. 成績

肉眼所見は、腫瘍は4×15×3cm大で被膜に覆われており、帯黄乳白色充実性で硬結感を有していた。断面は結合織により区画された大小様々な胞巣状を呈し、一部で無色透明な漿液性の液体を容れていた。スタンプ標本では、リンパ球や赤血球に加え、核は大型な円形から楕円形で、弱好塩基性に染まりやや豊富な細胞質を有する細胞が認められた。組織学的検査では、核はやや大型で円形から楕円形で1個または複数の核小体を有し、細胞質が好酸性に染まる境界不明瞭な腫瘍細胞が充実性、一部で嚢胞状に配列し、その周囲を膠原線維が取り囲んでいた。また、弱好塩基性に染まる同心円状構造物や、リンパ球が散在性に認められた。腫瘍細胞の一部でPAS反応陽性を示す微細顆粒を細胞質に認めた。免疫組織化学的検査では、腫瘍細胞は抗サイトケラチンAE1/AE3抗体に陽性を示した。なお、散在性に認められたリンパ球は抗CD3抗体に陽性を示した。

4. 考察

本症例は、肉眼所見、組織学的検査所見および免疫組織化学的検査所見から胸腺腫と診断した。今回、病理組織学的検査を行ったことにより、新たな情報を検査所間で共有することができた。今後も検査所間の連携をとりながら、双方の検査技術を向上してゆきたい。